

平成 25 年度

文教大学付属中学校
入学試験問題

《国語》

《注意事項》

1. 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
2. 問題は、 から まであります。
3. 解答の字数は 、 。 「 」 を含みます。

□ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

3・11を見つめ直し、それを乗り越えていくには、まず、自分を表現することをしてほしい。書くことでも、歌うことでも、踊ることでもいいし、友達と遊ぶことでも、おしゃべりすることでも何でもいいと思うのです。

自分を閉じ込めていないで、解き放ち、表現してほしいのです。大人たちは、A、子どもたちのおしゃべりを、あのね、と話したら、それがどんなに些細なことでもいい、聞く、受け止めるというのが大事になってくる。

これまでの世界が一瞬にして変わってしまった今、自分を表現していく、残していく技術がとても重要になったと思います。

それは数学の数式を覚えたり、英語の単語を覚えたりする以上に、自分を支える力になるんじゃないでしょうか。

文章を書くのが上手だとか、リズム感があるとか、そういう特別な力を持つ、持たないとは別に、その子なりに自分を一番表現できることだと思います。

① 日記とかノートとか、自分に自分の言葉で語りかけるといいうのもいいです。B、今自分が何を思い、何を感じ、何を考えているかということを書いていくんです。

100%わからなくても書くことでそれを明らかにしていく。それをやったときに自分を見ていると少し距離ができるんですよね。冷静に自分を見ていられる距離、つまり自分の感情に引きずり回されないだけの距離ができるということです。物を書くという作業にはそういう力があるんです。

ましてや震災で何かを失ってしまった子供たちが冷静に自分の喪失感とか、悲しみとかと向かい合うことはものすごいことでしょう。ただ、どこかでいつか向かい合わなければ、たぶん人は生きていけないと思うので、子どもの持つ大きなエネルギー

ギーを信じて、書くなり、読むなり、自分を表現する方法を見つけながら、いつかあの震災というものと向かい合ってもらいたいと思います。

C 被災地でも、同じクラスの中で、親や兄弟を無くした子もいれば、何もなくさずに無事だった子もいる。そこで温度差があると思います。

こういう言い方は語弊があるかもしれませんが、温度差があるのが人の集まりなんだというのも、また3・11で学んでいくことではないでしょうか。

③ 3・11で大きな影響を受けなかった地域の人たちも、東北の人が経験したあの大きな震災ということではなくて、自分の震災ということ、自分のものとして向かい合っていくしかないだろうと思うのです。

津波が来てすべてを失った子もいれば、家も何も壊れていないのに、原発のために二度とふるさとに帰れなくなった子もいる。そういうそれぞれが100人いれば、100人の震災がある。そのために表現する力を身につけてほしい。(中略)

自分にとって一番大切なことを言葉によって考えていこうとするのが国語の基本です。

語彙力や構成力、文章力を身につけ、

1

に到達するのが国語だと考えています。

④ 本当の国語の力がないと、やはり周りに流されてしまう。流されて、受けの良い、当たり前のことを書く。テレビで溢れかえったキャンペーンみたいに、「あなたはひとりではない」とか、「がんばろう、日本」とか、「日本はひとつ」というような言葉になってしまう。

あれはあれであの一瞬にはすごく意味があったのかなと思うし、全否定するつもりはないですけど、いつまでもああいう単純な、たったひとつの言葉で済ませるのは、やはりそれは違うし、危険であるとさえ感じています。

言葉の力、文章の力がある程度身につけてくると、それが杖となって、自分の中に入っていけるのです。

そうすると、私には関係ないと思う自分の冷酷さに対してゾツしたり、自分と同じような年頃の女の子のことが、よくわからないけど、話を聞いて泣けてしょうがなかったとか、誰の言葉でもない具体的な自分の気持ちが見えてくる。たどたどしくてもちゃんと自分の気持ちを綴れるということはその人にとってものすごい強みにもなる。そういう意味でも国語は必要だと思います。

⑤ それから、物語を書いてみるのもいいです。震災にあった子どもが現実ではない物語を書くということで、心の力をきたえられるというのがあっていいんじゃないでしょうか。

現実ではない何かを想像して文章を書くことは、本来、先のことを考えていけることにつながる。それによって心の力、心力、精神の力のようなものを培っていくのではないかと思います。

書くことはなんでもいいのです。震災にあった人たちは最初はむしろ、自分のことはあまりにもリアルなことなので書けないかもしれません。現実ではない何か別のことを書いてみるのは、眼に見えている、今自分に迫っている困難や苦しみから、一時的に避難することにもなるし、そこから先を見通すことにもつながるのです。

物語というのは、書いて誰かに読んでもらうことで初めて物語になるところがあります。たったひとりでもいいから、自分が書いた物語を読んでもらうことで人とつながっていく。それは、すごくおもしろいことだと言いたいですね。

『特別授業3・11 君たちはどう生きるか』より「国語の授業 あさのあつこ」

問1 A から C に入る適切なことばをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(ア) 要するに (イ) また (ウ) では (エ) たとえば (オ) なぜなら

問2 ①について、なぜ「自分に自分の言葉で語りかける」ことを「いい」としているのですか。

その理由としてふさわしい部分を、「くから」ということばに続くように、文中から二十四字でぬき出しなさい。

問3 ②とは具体的にどういうことを指していますか。その説明として、正しいものを選び、記号で答えなさい。

ア 被災地の中にもさまざまな支援活動^{えん}に対して、ありがたいと思っている人もいれば迷惑^{わく}に思っている人もいるように、支援がすべてありがたいわけではないということ。

イ 被災地の中にも家族を亡くしてしまった人もいれば、何もなくさず無事だった人もいるように、様々な境遇^{ぐう}の人がいるということ。

ウ 被災地の中にも原発の使用に対して反対の人もいれば、賛成の人もいるように、一つの物事には色々な意見があるということ。

エ 被災地の中にもそのまま被災地で生活を続けている人もいれば、別の場所に避難しているように、その生活圏^{けん}は自由だということ。

問4 ③のためには、どのような力を身につければよいのですか。文中から五字でぬき出しなさい。

問5 1 を補うのにふさわしいことばを選び、記号で答えなさい。

ア 他人の気持ちを自分の言葉で理解すること

イ みんなに受け入れられる言葉で表現すること

ウ 自分のことを自分で表現すること

エ 自分だけの物語を作っていくこと

問6 ④を他の表現でいいかえている語句を文中から十三字でぬき出しなさい。

問7 ⑤について、「物語を書く」ことで、どのようになると、筆者は述べていますか。

文中のことばを使って、二十五字以内で書きなさい。

問8 この本文の内容について、正しいものを選び、記号で答えなさい。

ア 何かを空想しながら物語を書くことは良いことだが、被災者は常につらい現実から目を背けてはならない。

イ 自分の気持ちを表現するには、文章を書くことが一番良いので、ほかの表現方法で表現するよりも、文章を書くべきである。

ウ 被災地の被害はさまざまなので、思い出したり、つらさを表現したりすることはなるべくしない方がよい。

エ 国語の力を身につけないと、簡単に周囲に流されてしまい、当たり前のことしか表現できなくなってしまう。

□ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

(主人公の赤尾慎之介は、生まれつき手足がない障害を抱えています。この春に新任教師として松浦西小学校に赴任してきました。介助員の白石の助けを借りながら、五年三組の担任をしています。)

あと三日で、終業式。五年三組の担任となって、すでに四か月近く経とうとしていたが、赤尾にはまだこの一学期を振り返る余裕などなかった。いま新任教師の頭にあるのは、一学期最後の水泳の授業で、なんとか五メートルを泳ぎ切りたい、ただそれだけだった。

「先生、約束忘れちゃだめだからね！」

準備運動のあとのシャワーを浴びおえ、白い水泳帽をかぶり直しながらもどってきた陽介は、いつもの監視位置でじりじりと太陽に焼かれてる赤尾に念を押した。この日の朝の会で、全体練習と個人練習の間の休憩時間に、これまでの特訓の成果を披露すると子どもたちに約束していたのだ。

この二週の特訓で五メートルを泳ぎ切れたことは、じつはまだない。しかし、一学期最後の授業というこの機会を逃せば、つぎに子どもたち全員がそろうのは二学期となってしまう。赤尾は、自分を信じた。

赤尾にも、子どもたちにとつても、この日の全体練習はやけに速く感じられた。

「はい、それじゃあ全員プールから上がりまーす。五分間の休憩にしますので、寒い人はタオルを巻いていてもいいことです」

この日の全体指導を担当する紺野のかけ声で、子どもたちはプールサイドへと移動していく。いつもなら、「もっと泳いでい

たいのに……」と名残惜しそうな顔でプールを後にする三組の子どもたちも、この日ばかりは待つてましたと言わんばかりにプールサイドへ上がり、体育すわりで〈そのとき〉を待った。

六コースのスタート位置に、赤尾が移動する。青柳と紺野にはあらかじめ了承を得ていたが、何も知らされていない一組と二組の子どもたちは、いったい何が始まるのだろうかといった表情で手足のない三組の担任を見つめている。

「先生、がんばれー！」

「ぜったい五メートルだよ」

後方にならぶ三組の子どもたちから、熱のこもった声援が飛ぶ。そのなかには、メガホンのように口に手を当てて、大きな声援を送る公彦の姿も見えた。

「慎ちゃ……赤尾先生、ファイトーッ！」

水中の五メートルラインあたりで待ちかまえる白石が、ひととき大きなさけび声をあげた。ようやく何が始まるのかを理解しだした一、二組の子どもたちから、自然と手拍子が起こる。三組の子どもたちがそれに続き、長さ二十五メートルの長方形は、たちまちあたたかな空気に包まれた。

「わあーっ」

子どもたちから、悲鳴にも似たおどろきの声があがる。赤尾の小さな体が、六コースのスタート位置から、突然、姿を消したのだ。そう、赤尾はプールに向かって勢いよく飛び込んだのだった。プールの底近くまで沈みこんだ赤尾の体が、じわりじわりと浮かんでくる。飛びこんだときの勢いを味方に、その体は少しずつ前へと進んでいく。水面近くまで浮上してきたときには、すでに三メートル付近まで達していた。

「先生、がんばれー！」

「あとちょっと」

赤尾の飛び込む姿にしばらく言葉を失っていた子どもたちも、赤尾の体が浮上してくるとようやくわれに返り、ふたたび声援を送った。

しかし、ここからの二メートルが長旅だった。極端に手足が短い赤尾の体では、いくら手足を動かしてみても、大きな推進力は生まれない。短い手足をバタつかせているだけの赤尾の泳ぎは、しかし、子どもたちの心に強く響いた。

「セーンセイ、セーンセイ！」

陽介の音頭で始まった「センセイコール」は、クラスを超えた大合唱となり、水のなかでもがきつづける赤尾の体を後押しした。

「セーンセイ、セーンセイ！」

「セーンセイ、セーンセイ！」

少しずつ、少しずつ、体が前に進んでいく。だが、同時に、赤尾の肺活量も限界を迎えようとしていた。息つぎの練習もしてみたのだが、やはり子ども頃と同じでうまくバランスが取れず、いともかたんに転覆してしまうのだ。

しかし、その先に、五メートルを示す赤いラインが見えてきた。赤尾は息苦しさ^⑤に耐えながら、必死に短い手足を動かした。

「セーンセイ、セーンセイ！」

「セーンセイ、セーンセイ！」

気付くと、プールの底に引かれた赤ラインは、赤尾の腹の下にあった。白石がすかさず赤尾の体をすくい上げる。

「赤尾先生、見事に五メートル達成！」

気のきいた紺野のアナウンスに、子どもたちからは最大級の拍手^{はくしゅ}がわきおこる。白石と紺野の手を借りてプールサイドに引

きあげられた赤尾は、すぐに公彦の姿をさがした。あばら骨が浮き出て見えるほどやせた体の少年は、じつと目を閉じ、何度も、何度もうなずいた。

赤尾が信じがたい快挙を達成した興奮が冷めやらぬなか、個人練習の時間が始まった。赤尾はしばらく肩で息をしながら、いつもの見学者用スペースのところから子どもたちを見守っている。しかし、その目はどうしても、一コースのところへばかりつくように立ちつくす公彦へと向いてしまう。

⑥ この日の公彦は、どこか様子がちがった。これまでは水面がわずかに波打っただけでもおびえた表情で顔を背けていたのに、この日はきびしい視線をじつと水面に向けている。顔を水につけるべく、決死の表情でそうとかがみこむ。しかし、結局は勇気が出ずに、また元の位置に顔をもどしてしまふ。そんなことを何回くりかえしているうちに――。

「やった！」

パイプ椅子の上にちょこんとすわっていた赤尾は、思わず身を乗りだした。公彦の顔が、ついに水中をくぐったのだ。一秒もたたずに顔を上げた公彦だったが、その表情はあきらかに興奮の色が浮かんでいた。⑦ いますぐ駆けつけて抱きしめてやりたい衝動に駆られたが、その思いを行動に移すより早く、公彦はふたたびかがみこんで、水中に顔を沈ませた。

問1 — ①について、どのような「約束」をしたのですか。二十字以内で具体的に説明しなさい。

問2 — ②と同じはたらきをしている「ように」を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 冬の星は宝石のように輝^{かがや}いている。

イ 言われたようにやってみてください。

ウ もうすぐ雨が降るように感じる。

エ 伊藤博文のように優れた政治家になりたい。

問3 — ③について、「一、二組の子どもたち」は何によって、状況^{ききょう}を理解したのですか。

正しいものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア 青柳と紺野の声援の様子

イ 三組の子どもたちの声援の様子

ウ 公彦の手拍子の様子

エ 白石の応援する様子

オ プールに飛び込む赤尾の様子

問4 — ④「あたたかな空気」について、声援は「手拍子」から最後どのようなものになりますか。文中から十字でぬき出しなさい。

問5 — ⑤について、なぜ「息苦しさに耐え」ているのですか。

その理由を説明した次の文を、適切な言葉を入れて完成させなさい。

(1 三字) をしようとする、 (2 四字) を崩^{くず}し、 (3 二字) してしまふから。

問6 — ⑥について、「この日の公彦の様子がちがった」のはなぜですか。

本文のことばを使いながら八十字以上、百字以内で理由を書きなさい。

問7 — ⑦について、どうして「興奮の色」が浮かんでいたのですか。その理由として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 病気がちな公彦が、初めてクラスの人々と一緒^{いっしょ}に水泳の授業に参加できたから。

イ パイプ椅子の上の赤尾先生が、自分に声援を送ってくれていたから。

ウ 障害を抱^{かか}えている赤尾先生が、懸命^{けんめい}に泳ぐ姿を見て、感動したから。

エ 水泳が苦手だった公彦が、初めて顔を水につけることができたから。

問8 「公彦」はどのような人物として描かれていますか。その説明として不適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 泣き虫ですぐ弱音をはく、弱々しい子ども。
イ やせてはいるが、最後まで諦めない粘り強さがある子ども。
ウ 涙もろく、情に厚い友達思いの子ども。
エ 水泳が苦手だが、それから逃げずに挑戦していく子ども。
オ 人のがんばりを一生懸命応援する、優しさのある子ども。

Ⅲ 次の各問いに答えなさい。

(1) 次の——線部の漢字には読みがなをつけ、ひらがなは漢字に直しなさい。

- ① 板のあつさを測る。
② 学問をおさめる。
③ 人質をかいほうする。
④ 異議をとなえる
⑤ 大勢の人が集まる。

(2) 次の空らん、身体の一部を表す適切な語を補い、後に示した意味になるように慣用句を完成させなさい。

- ① () もくれない。 ↓ 相手にしないこと。
② () が足りない。 ↓ 働く人が不足していること。
③ () がきく。 ↓ よく知られていることを利用して、特別な扱いを受けられること。
④ () がたたない。 ↓ とても対抗できないこと。
⑤ () を上げる。 ↓ 上達すること。

(3) 次の空らんに漢数字を補って、慣用句を完成させなさい。

- ① の句がつけない
② つ子の魂百まで
③ 一寸の虫にも 分の魂
④ 七転び 起き
⑤ 一を聞いて を知る

